

Curious Eyes of a Witch

元祖「山ガール」、山が好き、人が好き、好奇心の人

女性初のエベレスト登頂、7大陸最高峰制覇のアクティブライフ

田部井 淳子

登山家

仁木 洋子

空間演出プロデューサー



自分のペースで進む心地よさ

仁木 田部井さんの偉業は皆さんご存知の通り、1975年に女性初のエベレスト登頂、92年に世界七大陸の最高峰も登頂されました。

最初にお目にかかった時に、驚きましたのは、私より小柄で華奢な印象だったことです。

田部井 (笑) 山に行くというだけで、大きい人!と思われがちなんです。でもね、山登りって、大きいから良くて、小さいから不利ということではなくて、身体のサイズはあまり関係ないんですよ。

仁木 輝かしい登山歴でいらっしゃるから、勝手に大きい方と思ってしまうのじゃないかな。

登山のきっかけはいつですか。

田部井 小学校4年生の時に、初めて登山をして、競わなくていい登山が素晴らしいと感じたのです。「ゆっくりでいいんだよ」といってくれて、自分のペースで進むことが心地よく、それが、山登りの原点になっています。

仁木 まあ、私の母も山が好きで、高い山に登るために普段は近くの山へ。小中学生のころ、毎週のように連れられて、登りは何とか登るのですが、運動神経がない私は、下りが苦手でした。それでも、頬に受ける風や頂上に広がる空、山で見かけた高山植物の名前は今でも憶えています。

田部井 (笑) 下りは、バランス

がむずかしいから。

自分が行ったことがない風景を見ることはすごい刺激です。同じ地球上に、こんなところがあったのかと思うと、もっともっと知らないところがあるのだらうと思います。地図を見ると行ってないところがたくさんあるので、焦ってしまいます (笑)。

女性だけで目指した世界最高峰

仁木 女性だけで登山をしようとお思いになられたきっかけは?

田部井 男の人と岩登りなどをしていて、スピードや瞬発力など、絶対的に差があるとわかったわけです。肉体的に同じ構造の女同士で行く方が、フェアだなあと思いました。トイレも着替えも、特に長期間のヒマラヤなどは、女子だけのほうが、気兼ねもしない。それに、自分たちでやったという満足感もあるでしょう。1969年「女子だけで海外遠征を」を合い言葉に最初は7,000m、次に8,000mと目標を決め、女子登攀クラブを設立。70年に女だけで、7,555mのアンナプルナIII峰登頂。次はやっぱりエベレスト8,848mとなりました。

仁木 私がすごいなあとと思ったの

は、山の高さもさることながら、莫大な費用のことです。36年前、なかなか自費でいける金額ではありませんね。当時女性の初任給が4万円の時に4,000万円以上だったとか。どうやって資金集めをなさって、実行されたのかしらと思いました。

田部井 あまりにも金額が大きくて、いろいろな企業をお願いに行きました。丁度、オイルショックで大不況。計画書を見て、「いやあ、女だけでエベレストなんて無理、できっこない」といわれました。まだまだ、男は仕事、女は家庭という時代。女の校長も、市長もいない時代でした。今は、女性の宇宙飛行士がいる時代ですからね (笑)。ここ30~40年の差は大きいと思います。なかなかスポンサーは見つからなかったのですが、たまたま、テレビ局と新聞社が応援してくれることになり、感謝しています。

でも、自分たちが行くのに、ひとからお金をいただいて行くのは、何か心よしとしない、抵抗があり、エベレスト以降は、スポンサーは無し、すべて自費で行っています。

仁木 すごい。なるべく自己資金



2008年ベネズエラ最高峰ピコ・ボリバル5,007m登山中



チョーオユー 8,201mの頂上から見た世界最高峰エベレスト8,848m (左)

でとはいっても、2~3のスポンサーはおありかと思いました。登山というと、自分たちの楽しみと思われがちかもしれませんが、田部井さんが高い山に登頂されることで、多くの人が元気をもらえ、頑張れば夢が実現できるんだと希望をもつことができます。

田部井 大変ですけど、スポンサーは無しが楽ですよ (笑)。

ただありがたいことに、ある旅行会社が、私が行きたい山に普通の人がお誘いしてリーダーとして行くと、ツアーを企画して下さいます。ほかにテレビや雑誌の登山企画、講演や本の執筆などでお金をいただき、山に登っています。

仁木 ご理解があっていいですね。
田部井 はい、それで続けてこられたかなあと考えています。

好奇心と潔さ

仁木 お話を伺うほどに、田部井さんの好奇心とその行動力は想像の域を超えますが、その中で大学院にも行かれましたね。

田部井 2000年まで2年間、九州

大学大学院に通いました。修士論文は、「エベレストのゴミ問題」をテーマに取り上げました。

仁木 あのう、おいくつで?

田部井 60才です (笑)。自分が、講演をしたりして聞かれた時に、自分に何も環境とかのバックグラウンドがないなかで話すのは、よしとしなかったんですよ。

仁木 その潔さを生き様として目標にしたいと思います。

田部井 キチンと数値化して話ができなければ思いましたが、大変でしたよ。その間も山へ行き、大学院の先生方も調査にお連れしました。これまでの快適な生活を多少我慢しても、私たちが自然の中からいただいてきた恵みを次の世代に残さなければいけないと思うようになりました。教育の場でも、地球環境問題をもっと教えていくべきですね。

東日本大震災東北応援プロジェクト

仁木 多くの講演や復興支援のチャリティもなさっていらっやいますね。

田部井 私たちができるといって微々たるものですが、直後は、山の道具は役に立つからと、手袋などを送りました。その後どうする？となった時に、「避難所で何もしないことはとても辛いことなんです」と聞き、それで、ハイキングにお誘いしたら、「森や土の匂いがする」、「花が咲いている」、「気持ちいい」、「震災以来、主人と3か月ぶりに歩きました」とか。「今日はすごく元気が出たから、また、行きたいです」という声を直に聴けますから、去年の6月から17回続けています。

仁木 ハイキングをするなんて、考えても見なかったでしょうから、皆さん救われたでしょう。最初は、命が助かっただけでよかったでしょうが、その後は、家も仕事もなくし虚しくて、生きる気力が出なかったでしょうから、参加された方は、たくさんの元気や勇気を得られたことでしょう。

田部井 避難されている方も、次第に変わられるのです。最初は、お昼ご飯もバスもすべて用意しましたが、先月は、「台所ができたので、お弁当作ります」とおっしゃ



2012年7月 東北の高校生60人を富士登山に招待

るようになり、「お弁当作りが嬉しかった」と。また、「参加費の保険代くらいは負担します」とおっしゃるようになりました。

仁木 すてきなお話ですね。

ライティング・オブジェ展も、復興支援を10年は続けるつもりですが、昨年協力したからと、もちろん1回でもありがたいのですが、継続することは本当に大変です。

東北の高校生 富士山に登ろう！

田部井 本当に大変です。でも、1回や2回ではダメなんです、長く続けていかなければ。

今年の夏休みに、「東北の高校生を日本一の富士山へ」登らせようと、一歩一歩登って行けば、夢

は叶う、ということをお話してもらったんです。実施しようとしたら、すごくお金がかかるんです。そうしたら、お金集めは大人がやらなければと周りの皆さんがいてくださって、すごく協力してくださり、60名が参加しました。

多感な時期に被災しているの、応募したのを読むと、身につまされるような内容なんです。まだ人生が長いのに「生きている内に富士山に登りたかった」と高校生が書いているんです。「夢も希望もなくなり、何をやっても、死んでしまふかもしれないと思ったけれど、富士山に行けば何か変わるかもしれない」とか、盲学校の生徒さんが「少し見えている間に、富士山

に登ってみたい」とか書いているんです。初めての高校生を60人、安全に登らせるのは大変ですが、多くの山の仲間の皆さんが100人もボランティアを申し出てください、地元の富士吉田高校の生徒30人も参加し、合計90人ですよ（笑）。

仁木 すごい大所帯ですね。

田部井 リーダーに登山ガイドも安全に手厚い人員で行ったのですが、途中で「もう歩けない」とか、「高山病で頭が痛いからやめた」という高校生もでたのですが、山の仲間たちが、今は少し休もうとか、温かいものを飲んで深呼吸させるなどサポートをしてくださり、結局はみんな登れたんですよ。

仁木 素晴らしいですね、90人もいたら、挫折した人が少しは出たと思いました。

田部井 行く時は、高校生らしくなくて、元気がなかったんですが、帰ってきた時は、「やりましたあ〜」って、汗だくなんですけど、元気で達成感にあふれていました。20〜30センチしかない一歩一歩を続けて行けば、頂上に着くからと私がいったら、20センチといながら登ったとか、しゃがみ込んだら前の人の背中が離れて行くから、追いつけなきゃと思った時に、人が手を差し伸べてくれて、嬉しかったと書いてあり、続けなければと思っています。

仁木 行政の支援も必要ですが、住む箱を与えるだけではなく、皆さんに勇気を与えて、生きて行こうという、気持ちに繋げることがとても大切ですね。

人生を豊かで面白いものに

仁木 中高年の方との登山もなさっていますね。「お水を飲んで飲みなさい」と指導されていたのをテレビで拝見しました。

田部井 中高年より、最近は高々年ですよ（笑）。

さらに、「MJリンク」という若い女性（20〜40代）の山の同好会を立ち上げました。Mはマウンテン、Jは女性です。次の世代の人も山に馴染んでくれたらいいと思います。

仁木 最近は、山ガールブームでファッションもカラフルですね。今日の田部井さんの赤いジャケットも素敵です。ネックレスは、スイスのナイフですね。

田部井 これは、飛行機に乗っても大丈夫ですよ（笑）。

仁木 田部井さんの好奇心はますます盛ん。シャンソンのコンサートも評判です。これからなりたいことは？

田部井 各国の最高峰をめざしています。国連に加盟している国が193か国あるんですが、まだ60か国しか登ってないんですよ（笑）。

仁木 わあ、もう3分の1も登られたのですか、お元気ですね。

田部井 まだまだ、登っていない山が多くて。12月は、バングラディッシュの最高峰に登ります。来年2月は、日本の島の山、4月は私の故郷福島の新三の桜をみんなで見に行き、帰りは、おみやげをたくさん買いますよ〜と。
仁木 私も支援のつもりで福島のお菓子をよく買っています。



最後に元気の秘訣をひとつ…。

田部井 10年先でもやりたいことがあります。日々次々と予定があります。「明日は何をしよう」ではなく、皆さんも「明日はこれをする」と思われたらいいと思います。

仁木 12月の「ライティング・オブジェ」展では、田部井さんの作品も展示いたします。3月は横浜と福島でチャリティです。これからもどうぞご参加ください。今日は、元気の出るお話をありがとうございました。

田部井 淳子 Junko Tabei 登山家

1939年福島県生まれ。昭和女子大 英文文学科卒業。69年「女子だけで海外遠征を」を合言葉に女子登山クラブを設立。75年エベレスト日本女子登山隊 副隊長兼登山隊長として、世界最高峰エベレスト8,848m（ネパール名：サガルマタ、中国名：チョモランマ）に女性として世界初の登頂に成功。92年女性で世界初の7大陸最高峰登頂者となる。現在も、年5〜6回海外登山に出かけ、現在60か国の最高峰・最高地点を登頂。NPO法人日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト代表。NPO法人日本トレッキング協会会長。
www.junko-tabei.jp

仁木 洋子 Yoko Luna Niki 空間演出プロデューサー

熊本市生まれ。多摩美術大学卒業。（社）日本空間デザイン協会副会長。世界のモーターショーブースデザインやさまざまな空間の演出、プロデュースを行なう。地球環境・資源保護に配慮したその仕事は、欧州でも評価され国内外で積極的に活躍。東京・丸の内・有楽町で毎年12月に開催のチャリティ「ライティング・オブジェ」展を主催。2012年7月「明治天皇百年祭」の夜間特別参拝の空間演出デザインを行なう。
www.illuminate.co.jp



2009年 テレビのロケで北アルプスを23日間縦走



2011年5月 自然に親しみたい20〜40代の女性たちと出かけたエベレスト街道トレッキング